

基礎系

[S1-01]失行症患者の行為主体感は変容しているか？

ー 映像遅延検出課題と Keio methodを用いた検討 ー

*石橋 凜太郎¹、河野 正志¹、松川 拓¹、寺田 萌¹、信迫 悟志²、森岡 周² (1. 村田病院、2. 畿央大学ニューロリハビリテーション研究センター)

【はじめに】

失行症患者は、行為主体感 (Sense of Agency: SoA) の変容をきたす可能性があり (Pazzaglia, 2010), Nobusakoら (2018) は、映像遅延検出課題 (Shimada, 2010) を用いて、視覚-運動統合機能が低下していることを明らかにした。今回、映像遅延検出課題と SoA課題 (Keio method, Maeda, 2012) を用いて、失行症患者における SoAを横断的に調査したので報告する。

【方法】

対象は、本課題の理解が可能であった左半球損傷患者17名 (67.4±12.0歳) とし、失行症状の有無で失行群 (7名) と非失行群 (11名) に分類した。失行の重症度は apraxia screen of TULIA (AST) で評価し、失行群には錯行為における SoAの有無を聴取した。映像遅延検出課題は、2統合条件 (視覚-固有受容覚、視覚-運動)、7遅延条件 (33~594msec) で実施し、遅延検出閾値 (delay detection threshold: DDT) を算出した。SoA課題は、11遅延条件 (0~1000msec) と3EPA (event prior to action: EPA) 条件の全14条件で実施し、主観的等価点 (point of subjective equality: PSE) を算出した。統計学的に群間比較と相関分析を実施し、有意水準は5%とした。

【結果】

錯行為の SoAは、変容を訴える症例と訴えない症例が存在した。失行群の視覚-運動条件 DDTは、非失行群と比較して有意に延長した ($p<0.05$)。失行群の PSEは、非失行群と比較して延長傾向にあった ($p=0.057$)。視覚-運動条件 DDTと AST ($r=-0.757, p<0.001$)、および PSEと AST ($r=-0.707, p<0.05$) には、それぞれ有意な負の相関関係を認めた。

【考察】

映像遅延検出課題の結果から、失行群は視覚-運動統合機能が低下していると考えられたが、錯行為の SoA や SoA課題の結果から、失行群であっても必ずしも SoAは変容されない可能性も考えられた。今後、ASTの cut offに基づく分類や、認知機能の統制を踏まえた更なる研究が必要である。

【倫理的配慮 (説明と同意)】

本研究は、全ての参加者の個人情報の管理には十分配慮し、趣旨を説明した上で同意を得て実施した。